2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部 子ども発達学科	准教授	鈴木　順子
最終学歴	学　位	専門分野
金城学院大学大学院 人間生活学研究科	博士（学術）	保育・子育て支援

Ⅰ　教育活動

○目標・計画

（目標）

今年度の目標として、本校の保育者を目指す学生に基礎知識を教授し、将来、保育者として活躍できるための技術や態度を育成することに努める。それは教育学部のディプロマ・ポリシーに記載されている「幼稚園教員・保育士になるための免許と資格に必須の知識と基礎的・実践的な技能」を身につけられるように学生に対して真摯に取り組むという視点を大切にしている。その際には、建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」が重要となることが理解できるようにする。保育者の資質として、校訓である「真面目」、真摯に取り組むことの必要性が理解できるようにする。

（計画）

建学の精神や校訓を基盤として、保育者にとっての資質が理解できるように、私自身の保育者としての経験、子どもや保護者との関わりの大切さ、保育の内容等について授業の中で知らせていく。また、事例を通して、保育や子育て支援に対するイメージができ、そこから、自分たちが考えたことを発言、または紙面にて記述し、自分の考えをまとめることができるような授業展開を心掛けていきたい。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

子育て支援、幼児と言葉、保育実習事前指導 1A、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

保育内容総論、保育内容、子ども家庭支援論、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、保育実習指導 1A、保育実習Ⅱ事前事後指導

○教育方法の実践

今年度の授業は対面とオンデマンドで実施した。対面では学生の理解を深めるために、プリントを用意し、重要項目についてより詳細に話すように努めた。また自分の保育経験を基に話をし、授業の内容がより理解できるように、また保育現場での様々な話をすることで、保育者への興味や関心がもてるように配慮した。特に保育現場についての話をしている時は真摯に耳を傾け、話を聞いている様子がうかがえた。授業の途中で手遊びや言葉遊び等も取り入れ、学生が興味をもって授業に参加できるように心掛けた。授業の最後には本日のまとめや課題を課すことでその日に何を学んだかが明確にわかるようにした。

オンデマンドでの教材はパワーポイントを使用し、そこに音声を入れることで、学生が理解しやすいように解説した。毎回の授業に関する課題を提示し、期日を設け、出席の代わりとした。課題に関しては毎回一人ひとりの学生の文章を読み、それに対するコメントを一人ひとりに丁寧に返信した。課題の中で学生が自分の意見を述べたり、それに対して教員から意見や回答をすることで、保育の内容をより理解できたように思う。

また保育内容(言葉)に関しては、実習前に絵本の読み聞かせを行った。絵本の読み聞かせは実習中、部分実習等で読み聞かせをすることが多い。学生からは「他学生の読み方を見ることで自分の読み方を振り返ることができた」「実習で読む絵本を選ぶ参考になった」等が感想に書かれていた。私からも一人ひとりに読み聞かせのコメントをすることで、読んだ学生だけでなく、全体の学生にも絵本や読み方について学んだり、感じたりすることができたのではないかと考えられる。絵本をあまり読んだことのない学生にとっては多くの絵本を知るきっかけともなり、実習に際して活用できる面もあったように思う。

子ども家庭支援論に関しては一人ひとりが自分の住んでいる地域の子育て支援施設について調べ、皆でその内容を共有した。児童館や地域子育て支援センターでも同じような内容の親子遊びや支援が行われていることや、地域によって異なった支援もあり、勉強になったという声を聞くことができた。保育所実習前に行ったが、保育実習Ⅱの評価には「保護者支援・子育て支援」の項目も記載されているため、地域子育て支援にも事前に目を向けられたかと思う。また将来、地域の施設等に就職する際の一助となってほしいと考える。

保育実習指導の授業に関しては、私の部分実習の導入の仕方や制作の模擬を見せて、実際に指導案にそれを書かせ、一人ひとりに添削し、返却した。

SDGs AICHI EXPO 2022（常滑市）ブース出展(愛知県国際展示場 Aichi Sky Expo)、総合演習Ⅰ・Ⅱの各ゼミが参加(2 年生対象)、テーマ: 幼小接続を目指した森林環境教育のための教材・教具を開発（各ゼミの専門を生かしたオリジナルなもの）鈴木ゼミ: 草花を押し葉にして栞を作成、竹を使用した工作等、来場した親子連れを対象に行った。

大学祭では総合演習の授業の中で準備を行い、ゼミ生が参加(2 年生)、鈴木ゼミはキーホルダー作り、魚釣り(景品は手作り折り紙等)を来場した地域の親子連れ対象に行った。

○作成した教科書・教材

オンデマンドの授業に用いた教材はパワーポイントによる音声入り動画を作成した。また授業関連の本からできるだけ、学生が理解しやすい部分を抜粋し提示した。対面では補助教材として DVD を使用し、授業の内容がより理解できるように心掛けた。手遊び等のプリントも配布し、実習に活用できるように配慮した。

○自己評価

今年度は対面とオンデマンドでの授業展開を行った。対面では現場での話や手遊び等も含め、対面だからこそできる授業展開を心掛けた。またオンデマンドでは一人ひとりの学生に提出された課題のコメントをつけての返却をすることで、より理解が深まったように思う。学生も実習前に絵本の読み聞かせや地域の子育て支援に関しても実習前に学ぶべきことが多かったように思う。またオンデマンドにおいて、子どもの成長に関する授業動画を再度、閲覧することができることや自分の生活スタイルに合わせて、授業を受けることができること、授業において理解できなかった箇所は何度も繰り返し、見ることができるという利点があったようである。対面での実践と並行してオンデマンドでの一人ひとりの理解度を確認しながら、進められるこうした形での授業展開の良さも認識できた。

また自分の担当の保育所実習、幼稚園教育実習、施設実習訪問、小学校への実習訪問を全て対面で行い、園対応や学生対応を行った。また実習訪問報告書にも詳細に記載した。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

地域子育て支援　保育内容

○目標・計画

（目標）

保育・子育て支援の分野において、地域の子育て家庭に貢献できる研究、及び今後の講義等に活かせる研究を行う。

（計画）

現在までの研究では、地域子育て支援センター、保育内容等に関する事項を検討してきた。地域子育て支援センターではコロナ禍においての子育て家庭の調査を、さらに検討していく。また自身の担当科目である保育内容の研究について文献等を参考に検討、考察する。これらの研究成果をもとに、学会発表、及び論文としてまとめる。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・「名古屋のびのび子育てサポート事業提供会員講習会テキスト」名古屋市子ども青少年局子育て支援部子育て支援課主催 2016 年 1 月、鈴木の執筆箇所は、「4. 子育て支援制度について pp. 75－85」

（学術論文）

・鈴木順子『コロナ禍における保育：保育者へのアンケート調査を通して』愛知東邦大学紀要「東邦学誌」, 第 52 巻第 1 号、2023 年に投稿中

・鈴木順子『地域子育て支援センターの役割に関する一考察～コロナ禍における子育てを通して～』日本家庭教育学会「家庭教育研究」第 27 号、2022 年、23～31 頁

・鈴木順子『保育内容「健康」の位置づけの変遷に関する一考察～幼稚園教育要領を中心に～』愛知東邦大学紀要「東邦学誌」、第 50 巻第 1 号、2021 年、39～51 頁

・鈴木順子『保育内容「言葉」の教授内容に関する一考察』愛知東邦大学紀要「東邦学誌」、第 49 巻第 2 号、2020 年、21～39 頁

・鈴木順子『ファミリー・サポート・センターの役割に関する一考察～習い事との関連に着目して～　』日本家庭教育学会「家庭教育研究」第 25 号、2020 年、　49～57 頁

・鈴木順子『保育所保育指針と授業科目「保育内容総論」との関連について』修文大学短期大学部紀要, 第 58 集、2019 年、73～87 頁

・鈴木順子『新保育士養成課程における保育の内容・方法論　～子育て支援を中心に～』修文大学短期大学部紀要, 第 57 集、2018 年、19～28 頁

・鈴木順子『教育課程・保育内容の考察～新幼稚園教育要領・保育所保育指針の分析から～』修文大学短期大学部紀要, 第 56 集、2017 年、19～28 頁

・鈴木順子『父親の育児に関する一考察』日本家庭教育学会「家庭教育研究」第 21 号、2016 年、45～59 頁

（学会発表）

・鈴木順子『保育系学生による絵本の読み聞かせに関する考察』日本保育者養成教育学会 第 7 回研究大会（文教学院大学）、2023 年

・鈴木順子『保育系学生による子育て支援に関する一考察』日本子育て学会 第 14 回大会（文教学院大学）、2022 年

・鈴木順子『コロナ禍における父親の子育てに関する一考察：地域子育て支援センターの来所を中心に』日本保育学会 第 75 回大会（聖徳大学）、2022 年

・鈴木順子『授業科目「保育内容(言葉)」における実践からの一考察～保育学生の絵本の読み聞かせを通して～』日本保育者養成教育学会 第6回研究大会(日本女子大学)、2022年
・鈴木順子『保育実習を経験した学生の子育て意識に関する考察』日本子育て学会 第13回大会、ZOOM開催、2021年
・鈴木順子『コロナ禍における育児の現状と親のニーズに関する一考察～地域子育て支援センターの来所者を通して～』日本家庭教育学会 第36回大会(貞静学園短期大学)、2021年
・鈴木順子『地域子育て支援センターの役割に関する一考察～新型コロナウイルス感染症の状況下における子育てを中心に～』日本保育学会 第74回大会(富山大学)、2021年
・鈴木順子『保育系学生による部分実習の意義～保育所・幼稚園においての絵本の読み聞かせを中心に～』日本保育者養成教育学会　第5回研究大会(大妻女子大学)、2021年
・鈴木順子『保育系学生の絵本の読み聞かせに関する考察～実習において絵本を選択する場合の理由について～』日本子育て学会 第12回大会(甲南女子大学)、2020年
・鈴木順子『地域子育て支援センターにおける父親の育児講座への参加に関する一考察』日本保育学会 第73回大会(奈良教育大学)、2020年
・鈴木順子『保育系学生にとっての実習の意義～保育所・幼稚園の実習を踏まえて～』日本保育者養成教育学会 第4回研究大会(福山市立大学)、2020年
・鈴木順子『絵本の読み聞かせを通した父親参加の意義に関する一考察』日本子育て学会 第11回大会(白百合女子大学)、2019年
・鈴木順子『ファミリー・サポート・センターの役割に関する一考察～習い事との関連に着目して～』日本家庭教育学 第34回大会(貞静学園短期大学)、2019年
・鈴木順子『地域の子育て支援センターの現状～父親支援を通して～』日本保育学会 第72回大会(大妻女子大学)、2019年
・鈴木順子『保育所・幼稚園での実習を通しての学生の意識変化に関する一考察』日本保育者養成教育学会 第3回研究大会(東北福祉大学)、2019年
・鈴木順子『父親の子育て支援センター利用を通して』日本子育て学会 第 10 回大会(日本福祉教育専門学校)、2018年
・鈴木順子『父親の育児ストレス関連からの一考察』日本保育学会 第71回大会(宮城学院大学)、2018年
・鈴木順子『「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の検討～幼稚園教育要領・保育所保育指針から～』日本保育者養成教育学会 第2回研究大会(共立女子大学)、2018年
・鈴木順子『父親の育児ストレスに関する研究』日本保育学会 第70回大会(川崎医療福祉大学)、2017年
・鈴木順子『父親の育児に関する研究Ⅲ』日本家庭教育学会 第32回大会(貞静学園短期大学)、2016年
・鈴木順子『父親の育児に関する研究Ⅱ』日本保育学会 第69回大会(東京学芸大学)、2016年
・鈴木順子『父親の育児に関する研究』日本保育学会 第68回大会(椙山女学園大学)、2015年
(特許)
(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）
なし

○所属学会

日本保育学会　日本家庭教育学会　日本保育者養成教育学会　日本子育て学会

○自己評価

今年度の研究は、地域子育て支援センターに来所する父親のアンケートを基に学会発表の内容をまとめた。また授業内容(保育内容等)を検討した発表も行った。論文については保育所に依頼し、保育者にコロナ禍における保育についてのアンケート調査を行い、分析し、論文としてまとめた。

学会発表 3 件と論文 1 本が今年度の業績である。今年度の研究課題である地域子育て支援センターと保育内容については学会発表等にて達成できたといえる。また今年度は地域子育て支援センター(母親対象)にアンケート調査も実施したため、これを来年度の学会で発表していく予定である。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

所属委員会での情報の確認・把握を行い、任務の遂行を行う。教授会、学科会議、幼小保課程部会等に参加する。

（計画）

所属委員会(キャリア支援センター運営委員会、5 月末まで生協委員会)、教授会、学科会議、幼小保課程部会等にて自身の役割を果たす。キャリア支援センター運営委員会活動においては、その役割と課題について認識し、委員の一員として委員会の運営に携わる。

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、キャリア支援センター運営委員会

○自己評価

各委員会への出席、及び学科会議等の出席をした。また所属委員会(キャリア支援センター運営委員会、5 月末まで生協委員会)にて自身の役割を果たした。キャリア支援センター運営委員会では、欠席はなく、毎回、出席をした。議事録作成も 3 度行った。また求められたことに対する意見も述べた。

生協委員としては 5 月末までが任期であり、生協総代会を前に学生組合員から書面議決書等の配布と回収をした。配布、及び回収数：教育学部 26 名。

入試関係では、学内入試時に面接、東邦高等学校入試監督を行った。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

研究の成果を地域に還元し、地域貢献をする。研究を所属学会で発表することにより、所属学会会員と意見交換をすることで知見を広め、社会に貢献する。大学のディプロマ・ポリシーにも記載されている「地域社会に貢献しうる人材育成」を自分自身でも実践していく。

（計画）

地域子育て支援センターの利用者を対象に調査した結果をさらに詳細に分析し、各所属学会にて研究発表を行う。また発表内容をセンターに報告することで地域に還元する。

○学会活動等

日本保育学会、日本保育者養成教育学会、日本子育て学会での大会に参加、及び発表することで、地域で実施した調査をより深く考察することができた。また私の発表を見られた参加者からの質問に応じ、理解を深めて頂いた。

○地域連携・社会貢献等

地域子育て支援センターや保育所でのコロナ禍における保育や子育てについて調査をし、それらをまとめ、検証し、各施設に調査結果と検証内容を還元した。

○自己評価

保育所や地域子育て支援センターの調査の還元等を通して、おおむね地域貢献ができたと感じている。また調査内容を学会発表や論文としてまとめることができ、目標は達成できた。

V　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）（事前記載項目）

大学のディプロマ・ポリシーにも記載されている「基礎学力を踏まえた専門知識と自らの経験を基に、創造的に考えたうえで、課題について的確に判断し」うる人材を育てることを念頭に授業に関わる研究を進めことにより、常に学ぶ姿勢を心掛けるようにする。具体的には、自らの知識やスキルを向上できるように、教育、研究活動に対して文献や学会への参加等を通して学ぶ姿勢を心掛ける。

VI　総括

授業に関しては、学生から一定の評価は得られたように思う。学生に授業をするにあたり、わかりやすく内容を提示し、また何を目的に授業を受けているのかを明確にしたことにより、学生の理解もより深まったように感じられる。

今年度の研究活動の目標も達成することができた。今後、さらに精進し、社会貢献に繋がる成果の取り組みに尽力していく。

以　上